

# आयूस: あーゆす

〈発行〉 京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足 80

## 食環境に適應する

図書館長・教授 末次 信行

いつものように何気なく食べている食事の内容は、民族の長い歴史の中ではぐくまれてきた食文化、食習慣やその人の嗜好などである程度は決まっている。いいかえると、何をどのようにして食べるのかはその人が生活している食環境の中で決まるのである。

現在、我が国の食環境をどのように認識すればよいのか、食べたいものはいつでも、どこでも、いくらでも食べられる飽食の時代であるがゆえに簡単ではないが、食環境を食（食料、食品）の流れとして捉え、その流れが川のように上流、中流から下流へと蛇行する状況を食の環境要因として考えてみたい。食の流れが、①食料生産（農産物、水産物、畜産物、林産物）→②生鮮食品→③食品の貯蔵・加工→④食品の流通→⑤食品の消費→⑥環境への負荷 というように流れるとすると、これは決して逆流することがない流れである。そして、上流から下流に至る、そこここにいろいろな環境要因が見え隠れしているといえる。たとえば、①食料生産では、BSE、鳥インフルエンザ、遺伝子組み換え作物など世界中に重大な影響を及ぼす環境要因がある。④食品の流通→⑤食品の消費では、食のグローバル化の影響が著しく、食品の流通形態である食品スーパー、コンビニエンスストア、外食チェーンレストラン、テイクアウトなどが消費者のニーズに合致して、米食を基盤とした「日本型食生活」が極めて多様な食生活へと大きく変容したことはいうまでもない。

食環境にどのように適應するか、上流の環境要因は見えにくく、分かりにくいのでしっかりと情報を集めて自分なりの考えをもつことが肝要であろう。下流の環境要因は直接的に日々の食生活に関わるので、健康を維持し、安全・安心が確かめられる食生活を営むためには、適切な判断と選択が不可欠である。

下流の環境要因で、とくに環境への負荷を低減させるためにどのように適應すべきであるのかは社会全体の重要な問題である。食品廃棄物（食べ残し）や容器包装廃棄物の発生抑制とリサイクルについては日常的に取り組まなければならない。地球規模での環境負荷を低減することについても関心が高まってきている。生産地から食卓までの距離が短い食料を食べた方が輸送に伴う環境負荷が少ないであろうという仮説（フードマイレージ）が英国の消費者運動家、ティム・ラングにより提唱されている。輸入大国である我が国は、食料輸送に石油エネルギーを消費し、地球温暖化と深く関係しているのである。日本にも地域で生産したものをその地域で消費するという考え方（地産地消）があり、これもまた環境負荷を低減する望ましい消費活動といえる。

味覚の秋である。各地で旬の作物、魚介が収穫されている。生き生きとした旬の食べ物の味、香り、色彩を楽しむことが地球温暖化を少しでも抑止しているのだと考えたいのである。

## 自己完結するコミュニケーション

教授 森川 知史 (意味論・記号論)

現在のコミュニケーションの多くが、決して相手へと広がらず、自己中心的に自分のうちに閉塞してしまっているように思うのは、私ひとりだろうか。

言動をする人と人相互のやりとりがコミュニケーションだったはずだ。その過程で意味の共有が確認され、他者との共感が生まれる。コミュニケーションを通じてより確かな自己が育まれていく。ところが、このメカニズムが、いまの社会ではうまく機能していないように見える。

連日のようにメディアは、理解しがたい青少年の事件を報じ、現代人の自己中心的な言動について論じ、「自己チュー」ということばさえ作られた。無論、メディアの論調がどの程度この本質を捉えているかは疑問なしとはしないが、大きな視野で眺めたとき、このことが現代人のメンタリティの一面を捉えていることに間違いはないように思える。

「他者と何らかのものを共有すること」がコミュニケーションであるとすれば、自己中心的な言動は、明らかにこれと正反対の行為だ。相手の言動を予測したり、相手の言動に回答したり、共感したり、という言動には、相手の側から自分の言動を捉え直す内省が必要だ。相手と「共有する」ためには、自分だけではなく相手のこと、他者のことを考えるということがなくてはならない。

だが、多くの場合、現代人のコミュニケーションでは、「何らかの新たなもの」が共有されるのではなく、それぞれの「自己世界」の内部で自己完結してしまっているように見える。それがコミュニケーションであるかぎり、多くのことばが費やされ、意味や価値が二人の間で交換されるのだが、相手の回答から自分の理解や認識や思考を変えることをせず、どこまでも自己中心的に相手への働きかけを繰り返す。このような自己完結したコミュニケーションが増えているように思えるのだ。

近年、自分や誰かについて、身に付けている服やアクセサリなどで説明する人が目立つようになった、との指摘がある。「私、ヴィトンのひとなんだ」

とか「あの子はシャネラー」というように言うのだが、こういう行為を「モノ語り」と呼ぶのだそうだ。自分を演出するのにブランドというモノに寄りかかり、ときには自身の経済力以上のモノを身に付ける。彼らはブランドで飾られた自分に満足を感じるのだろうし、その限りでは、自己愛の強い人間だろうから、「モノ語り」の人たちが交わすコミュニケーションは、どこまでも「自分」へと向かう自己愛的で自己完結的なものだと言えるだろう。

ただここで、間違っただけとはいえないのは、「モノ語り」の人たちが必ずしも強烈に「自己中心的」な人たちとはかぎらない、という点だ。確かに、モノに寄りかかって自分を演出することに夢中になるのは、相手ではなく自分にばかり注目する行為だと言えるし、モノにばかりこだわるのは、相手や他者という「人」に関心のない身勝手な態度とも見なせるだろう。しかし、彼らがこだわる「自分らしさ」がブランドというモノに寄りかかったものであることを考えると、彼らの「自己」の頼りなさが見える。彼らは常にブランドによってしか「自己」を語れないし、そのブランドの意味を共有してくれる少数の理解者から承認されなければ、彼らの「自己」は維持できないのだから、「自己中心的」になろうにも彼らの「自己」は極めて頼りないのだ。

確かな「自己」(自分らしさ)は、相手や他者との関係に支えられて初めて手に入れられるものであって、いくら高級ブランドやグッズで周辺を飾ってもだめだ。「モノ語り」が繰り返され、コミュニケーションが自己完結しているかぎり、揺るぎない「自己」を発見できる場としての「他者」が現れてくることはない。

「モノ語り」をする人たちは特殊な人たちだ、と考えない方がよいだろう。彼らの姿は、現代に生きる私たちの「典型」ではないか。自分を大切にしたい気持ちが強すぎるために臆病になって、他者の奥深くに飛び込むことができず、自己中心的に振る舞いながらも、いつも自己への不安を抱えている。対人関係での、こういう矛盾した葛藤は、現代に生きる私たちの多くに内在する問題ではないだろうか。

# 私のすすめる3冊

助教授 大久保 智 (教育学)

## 1. 『種まく子供たち—小児ガンを体験した七人の物語—』 佐藤律子 編/ポプラ社

私が解説するまでもなく本書は「小児ガンの体験談集」であり、編者が「はじめに」で、その趣旨を語っている。「闘病している子供たちは、世の中にたくさんのく種をまきつけています。元気の種、勇気の種、思いやりの種……。そして、どの子供も野の花のように凛としています。その種がいつか芽ばえ、たくさんの人の心のなかで育つことを願って……」と。「凝縮された時間を生きている」ひとりひとりの子供の魂からの叫び声をどうかしっかりと聞き届けて下さい。

## 2. 『がんばらない』 鎌田實 著/集英社

本書を読みながら私自身何度も涙した。「実に見事に落ちぶれた病院」、信州、諏訪中央病院が、全国から注目的となる理想的地域医療病院へと成長していくプロセスを描いたものである。病院関係者、患者、地域の人達の実になまなましい人間の姿が浮かび上がってくる。病院入口の知的ハンディをもつ人々の書、「がんばらない」「生きている」「ありがとう」の作品が現代医療のあり方にすごい迫力で問題提起をつきつけてくる。情報長寿社会で生きる人間のさびしさに目を据えた医療について考えさせられる本である。

## 3. 『バカの壁』 養老孟司/新潮新書

読後、目から鱗が落ちた思いであった。何かがちがって映るのである。この眼に。外の世界が、そして現象が。たしかに色々なことが書かれている。自分、意識、言葉、身体などなど。しかしどの角度から切られても、出てくるのは人間の「知る」、「わかる」という営みの実体である。魚をとる投網のごとくにカテゴリーを投げかけて現象を捉えていたはずの私の認識論が根底から覆された思いである。著者の語る大地に根ざした二元論の立場に立てば、そうではない政治・経済・宗教・科学などの皮相性がありありと見えてくる。

知の蓄積—ニュートンの言葉から—

私がさらに遠くを

見ることができたとしたら、

それは巨人たちの肩の上に

立つことよってなのです

『アイザック・ニュートン』(翔泳社)より

【解説】

偉大な業績はひとりの手でゼロから生み出したものではなく、先人の業績の積み重ねのもとに、なし得ることができ、先人達の知の蓄積の上に学問の発展が成り立っているというような意味です。

巨人の肩にとまる小人という比喻は、中世以来のもののように、ニュートンが創り出した表現ではないようです。ニュートンのこの言葉は、一六七六年二月五日に、ロバート・フック宛に書いた手紙の一文です。

※ アイザック・ニュートン(一六四二—一七二七)

イギリスの物理学者、天文学者、数学者。

地球と天体の運動を初めて実験的に示した。

ロバート・フック(一六三三—一七〇三)

イギリスの自然科学者。フックの法則を発見。

【参考】

ニュートン/岩波書店

巨人の肩に乗って/翔泳社

## ❁❁❁❁❁❁❁ 「出口のない海」を読んで ❁❁❁❁❁❁❁

人間生活専攻2回生 藤田晴菜

この本は、戦争の話です。そして内容は主に人間魚雷「回天」のことについて書かれていました。私は回天のことは知りませんでした。回天は敵艦を発見したら海中で母艦から発進し、途中でいったん浮上。潜望鏡で敵艦の位置を確認し、後は深度数メートルの海中をただひたすら命中するまで走らせるというものでした。脱出装置はなく、それは発進と同時に死を意味することになります。回天に乗った人はいったいどういう気持ちで訓練に望んだのだろう。死ぬとわかっていながら回天を発進させる気持ちは、家族を残して一人回天の中で死ぬ気持ちは、どういったものだったのだろう。正直そんなこと恐ろしくて考えたくもない。そんな状況におかれた時、私は果たして人間でいられるのだろうか。なんら変わらない生活をしていて、夢もあり、これからいろんな経験をして人間的にも成長していく時期に、戦争になって軍人精神を叩き込まれたり、いろんな訓練を受けさせられたりしたら、今までの生活とのあまりの違いに現実を受け止められるのだろうか。真正面から戦争に立ち向かっていくことができるのだろうか。私にはとても、すべて受け入れる自信がありません。でも戦争は実際にあったことで、当時の人はそれに従うしかなかった。受け入れることしか選択肢はなかったわけだから、その当時の若者たちのパワーが戦争に使われたことは、非常に残念なことだと思います。その当時は国のために命を捨てることは当たり前だったのかもしれない。この本の中で、主人公の並木に、弟のトシ坊が「兄さん。お国のために立派に死んでください！」と言っているシーンを讀んだ時、強い衝撃を受けました。弟は六年生なのに…。まだ小学生なのに…。それなのになんの疑いもなく国のために死ぬるように教育を受けてい

る。すごく恐ろしいと思った。弟のトシ坊はそれが正義だと思ったのだろう。国でなくとも家族のために恋人のために死ぬことが、正義であって良いのか。弟のトシ坊が言った言葉は私の心に深く残りました。戦争はすべてを狂わせてしまうものです。当時の人は戦争を起こすことによってどんなメリットがあるのかをちゃんと考えたのだろうか。疑問に思いました。勝てる戦争ならしても良いのか。もし勝てる戦争だとしても相手国のことはどうでも良いのか。自分たちさえよければそれでいいのか。それではあまりにも幼稚すぎないか。大人であるならば武力というかたちはさけてほしかったと思っし、人間の未熟さを感じました。この一冊の本を通して命の重さをあらためて感じました。そして死んでいった人も、生き残った人も、それぞれの心の中に大きな傷痕を深く刻んだ戦争が憎いと感じました。平和とは何か、自由とは何なのか、この本には色々と考えさせる要素が多くあるよう思います。戦争を題材にしている本は暗く重々しいものですが、この本は戦争という重々しい中に、夢や希望というものも内容として含んでいたの読みやすい物語であったように思います。感じるもの、得たものは大きかったと思うのでぜひいろんな人に読んでもらいたいと思いました。

『出口のない海』 横山秀夫 著 (講談社)



〈お詫びと訂正〉

「あーゆす14号」に下記の通り誤りがありましたので、お詫びして訂正申し上げます。

誤

正

2頁 トライラスとクレシダ トライラスとクレシダ